
Angel Code

今宮いたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Code

【Nコード】

N7229X

【作者名】

今宮いたる

【あらすじ】

Angel Code それは神をも恐れぬ天使の因果律
中里翔がトリップしたのはドラゴンが空を飛び回る異世界だった！
？ 貧乏学生の中里翔は突如モンフォール家皇女、ソフィーにパートナーとして異世界に召喚されてしまい…？ 超能力異能バトルあり、ヒロイン弱めの主人公なかなか強い系です。

強制召喚！

隙間風が入るドアを開け、電気のスイッチを押した。

「……あれ？」

部屋は暗いまま。何度も押すが、何も変わらない。

中里翔は再び絶望する。

ついこの前ガスを止められたばかりなのに、こんな早さで電気まで止められるなど思いもしなかった。

「はぁ」とひとつため息を付き、何も置いていない居間に腰を下ろす。畳はもう畳といえるのかどうか怪しいほどに劣化し、いくら掃除しても埃っぽい部屋に咳が出る。

中里翔はとても貧しい。見るからにボロボロのアパートの狭い一室に住む彼は、高校2年生でありながら毎日アルバイトをして生計を立てている。彼の親は超巨額の借金を残して蒸発。生きているのか死んでいるのかも分からない。そのとんでもない親が残した借金を返すべく青春のすべてを削って、いや青春どころか人生のすべてを削って返済に苦心している。

彼はおもむろに立ち上がり、洗面所へ向かう。

錆びついた蛇口をひねり、手を差し出す。

「……」

何も出ない。

「……」

彼は無言で元いた場所に戻り、「もー！」と声を上げて仰向けに寝転ぶ。いや、寝転ぶと言うより、倒れこむと表現したほうが近いかもしれない。

水も止められていたのだ。

「なんで俺はすっかりこんな目に……」などと思ってもしようがないことは彼が重々に承知しているので、そんなことは嘆かない。中学生の時もずっと働き詰めだった。雇って来ていた店主も彼の見掛

けで高校生ではないことに気づいていたが、「人には言えない事情があるのだろう」と、温情により内密で働かせてもらっていた。このように、こんな生活をしているのはついこの前からのことなどと言うわけではない。もうずっとこうなのだ。どう足掻いても抜け出せることなんてできないということなど、まだ子供心の残るこの当時から分かっていた。腹の底から理解していた。理解というより使命だと思ふ感情の方が強かったかもしれない。そうでもしないと、こんな理不尽な環境に投げ出された自分自身を、彼自身がフォローしきれなかったのだ。

一言で言ってしまうえば、彼の中にあるものは『諦観』の文字だけだった。

この世の全てへの諦観。自分を救ってくれる人も、自分を愛してくれる人もさえもない。否定したいが、現実が彼をがんじがらめにして絡めとってしまう。

今日も働き詰めで帰宅した彼だが、居間に倒れこんだままそれ以上ピクリとも動こうとしない。ご飯も、なけなしの100円で購入したパンを昼ごはんに食べただけでそれ以外は何も口にしていない。そもそも、この家に冷蔵庫などないので食料を保管する所などないのであるが。

彼はそのまま深い眠りへとついてしまった。

雀の囀りが聞こえる。

昨夜の制服姿のままの翔はその清々しい朝のお告げで目が覚める。時計は腕時計しか持っていないので、眠気の残る眼を右手でこすりながら左腕手首にはめているそれを確認する。

時刻は8時20分。

思わず「うげえっ」と悲鳴にも似た声を漏らしてしまう。ただで

さえ困窮している生活の中で必死に学費を捻出している彼は遅刻などという勿体無いマネはできない。何より次の奨学金に大きく響いてしまうので、無遅刻無欠席全出席の皆勤賞はどうしてもゲットしておきたい肩書きだ。

「うわああ」という情けない声を上げながら急いで用意をする。と言っても、制服は既に着用済みであるので、カバンに時間割を合わせて教科書をつっ込むだけで用意は完了した。そしてその重いカバンを引っ提げて勢い良く玄関の扉を開いて猛ダッシュ。自宅から学校までは歩いて約25分。全力で走っても8時半から始まる朝の会には間に合わない。

彼は全力で走った。なりふり構わず走った。自分の人生を賭ける勢いで走った。まるでオリンピック決勝の舞台で疾走するランナーであるかのように、走ることにのみ集中していた。

彼の目の前に広がるのは道。

高速で視界を流れる道、道、道。

半身をかがめて全力で走る彼は、前を向く余裕なんて一切なかった。

だから。

だから気付くはずもないのだ。

大通りに面した交差点が赤信号だったことなど、彼の視界に及ぶ訳がないのだ。

もちろん、全速力で赤信号をぶっちぎる青年に大型トラックのブレーキが間に合うはずもない。

翔にそれを気付かせたのは、金属を引き千切ったかのように耳を劈くブレーキ音だった。

「あ、これはダメなやつだ」と一瞬で判断する。周囲から聞こえる

悲鳴。恐らく通行人の人たちが今眼の前で轢かれようとしている一人の青年にもたらされる悲劇に悲嘆する声だろう。

目の前に迫り来る巨大な鉄の塊。運転席の窓からは必死にブレーキを踏むおじさんの姿が見える。

走馬灯が流れる。

彼の幼い頃の記憶。

ずっと施設に預けられっぱなしで、親が引き取ったかと思えば口々に育てるわけでもなく。絵本数冊と適当なおもちゃで遊んだことしか記憶にない幼少期。誰も来てくれなかった参観日と運動会。教科書しか読むものがなかったから、一日中それを読みふけていた中学生時代。それでも中里翔は親に振り向いて欲しくて必死で勉強した。なぜ勉強なのか。彼にはそれしか思いつかなかったからだ。勉強をするのはタダ。お金がかからないことで、努力ができるもの。それが勉強だったのだ。

だが、その健気な場面でさえ、登場するのは彼一人。誰もいない。

彼の記憶には、自分以外誰もいないのだ。

彼の目からは涙がこぼれた。

小さい声で「畜生……！」と呟く。

その声さえ目の前で猛り狂う冷たい鉄の塊の金属音でかき消されてしまう。

「ああ、何も無い人生だったな」

ぶつかる瞬間、彼はこの光景がコマ送りの映像の切れ端のようにつながってゆく感覚を覚えた。まるで自分の周りの空間だけ時間が

緩やかに流れているような、そんな感覚だった。

「もし……！　もし次生まれ変わることができればなら……！　本当にほんの少しでいいんだ……雀の涙程も無くてもいい……！　それでもいいから、今よりは希望の持てる人生を　」

トラックは無情にも、殆ど勢いを殺すことができないまま通過した。

悲鳴から静寂へと変わる。

目を覆う通行人達は恐る恐る瞼を開く。

しかし彼らは中里翔を見つけることができなかった。

それどころか、道路はタイヤ痕があるだけで、血一滴、布切れ一枚も落ちていなかったのだ。

翔の顔には何か柔らかいものが当たっていた。とても気持ちがいい。今までに経験したことのない、まるで天使に包まれているような感覚だった。思わず頬ずりをしてしまう。

「ハッ！　これが俗に言う天国！？」

彼は自分の辛かった過去を振り返り、涙が溢れるような思いでその柔らかいものに顔を擦り付ける。

「な、な、何してんのよ　　！！」

急に顔面が腫れ上がるような痛さを覚え、彼女の悲鳴と共に彼の体は後方に飛ばされる。同時に「この変態！　変態！」と罵る声。

「突然私の胸に飛びついてくるなんて、いい度胸をしているじゃない？」

ぶたれた右頬をさすりながら、我に返る。

「あ、あれ？　俺、死んだんじゃ　」

見上げると、目の前にはブロンドの美少女。おとぎの国から出てきたような流麗な顔立ち。どこかの王国のお姫様かのような気品を漂わせながらも、16、7歳らしい可愛さも兼ね備えている彼女に、翔は思わず言葉を失ってしまう。

そして、周りからは何故か拍手が聞こえる。

「ソフィー、よくやった!」「うわ、男だ!」等々の歓声のような感想で周りが沸き立てる。翔は辺りを見回すと、彼とその目の前の少女は大勢の人たちに囲まれていたのだ。何が何だかまったく訳がわからない。

「……あなたがパートナー、ねえ」

その優美な少女は彼の手を引き起立させる。

「私の名前はソフィー・ド・モンフォール」

そう告げると何やら不服そうに目を背ける。

先生と見られる人たちに律される。

「あなた、今から私のパートナーになりなさい」

何を言っているのか全くわからない。

ふと空を見上げると、見たこともない巨大生物が空を飛んでいた。彼の幼少期に絵本で見た記憶が正しければ、あれが『ドラゴン』というやつではないだろうか。

彼は意識が遠くなるのを感じた。

強制召喚！（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

ストレシエール国学院

「中里！ 中里！」

自分を呼ぶ声がある。この唖れた声は担任の先生だ。声はすれども目の前の世界は真つ暗。「ヤバい、授業中に居眠りなんて！」と、咄嗟に思った。なるほどそれならば先ほどの変てこ異世界も「夢でした！」で無事解決できる。彼はホツと安心したが、それでもこの厳しい極貧の現状には何ら変わらないので、安心というのは少し語弊があるだろう。彼は必死に起き上がろうと体に全身全霊の力を込めて「起きろ！」と指示を送る。何度も念じると、段々と体が順応するようになってくる。体に力が入る感覚。「よし、起きられる！」と、一気に力を入れて上半身を持ち上げる。

「すみません！」

やっと起きることができた翔は、同時に謝罪の言葉を添える。

「……………」

そつと目を開けると、見たこともない部屋だった。

まるで高級ホテルの一室のようであった。いや、それよりもずっと広いかもしれない。翔は何がなんだか分からなかったが、ひとつだけ分かったことは、「これは教室でもなければ自分の部屋でもない」ということだった。辺りを見回すと、自分の寝かされているベッドの右横でおでこを赤くしてぶっ倒れている、見覚えのあるブロンドの美少女。紺色の上掛けと制服と見られる白色の服に、紺のスカート。

思わず「うわあ！？」と声を上げて驚いてしまうが、「何が『うわあ！？』よ！ 痛いじゃない！」と涙目でおでこをさすりながら必死に文句を言ってくるこの少女は一体何者なんだというのが、翔が真つ先に浮かんだ疑問だった。

「あのお……………、誰？」

意外と冷静な翔。世界が一転しすぎたら逆に大人しくなってしまう

うというのも人間心理的に分からないでもない。自分の汚れたみすばらしい制服と部屋の高貴さが全くもってミスマッチだ。純白のベツドと布団に、彼の汚れが浮き出てきそうさ。

「自己紹介してあげたじゃない。ソフィー・ド・モンフォールよ」「ソフィー……モン……？」

見るからに日本人ではない名前。確かにそう告げる美少女は日本人ではなさそうさ。

「略すな！ 誰がソフィモンよ！ そんなで、あんたは？」

彼は別に略したつもりはない。続けて「俺は中里翔」と自己紹介するも、「シヨウ？ ふうん。ま、何でもいいわ。それじゃ、行くわよ。あんたのせいで遅刻してるんだから」と少し適当に流されてしまう。

「ちよ、ちよつと待て！ 一体ここはどこなんだよ？ 家に帰して欲しいんだけど！」

「はあ、家。あんたの家はここよ。ストレシエール国学院の私の寮があんたの家。分かった？ じゃあ行くわよ。付いてきなさい」別に学力が低いわけでもない翔だが、さすがに彼女が言っていることは一つも理解出来ない。

「おいおい！ わかるわけないだろ！？ とにかく帰してくれよ！

警察呼ぶぞ！？」

最終手段の警察の名前を早くも引つ張り出す。さすがに今回は彼が有利だろう。誘拐罪に当該し、可哀想だがこの少女は逮捕。仕方がないが、困窮している彼はこのような手段を使ってもこの状況を打破して学校やアルバイトに戻らないといけないのだ。

「……？ 何それ？」

訝し気な視線を送るソフィー。全く堪えている様子もない。翔はこの態度に逆に気圧されてしまう。

「意味分かんないこと言ってるわよ、さっさと付いてきなさい。蹴るわよ？」

同時に腰のあたりに回し蹴りを食らう。「脅しても何でもねえ！」

という文句も言えないまま、半分引きずられるように連れていかれた。

廊下は真紅のカーペットが一面に敷き詰められており、気品が溢れ過ぎていてどうしようもない。自分の置かれていた状況がコンマ1ミリも理解出来ないまま、ただただ説明もなく連れて行かれる翔の驚嘆で声も出ない。

彼女に連れられて長い廊下を歩いていると、ひときわ大きな扉が登場した。

ギギギ……と重厚な音を立ててその扉を開くソフィー。

目の前に広がる景色はまさに圧巻だった。

果てしなく広大な建物の中に総勢3000人はいるだろうか、ソフィーと同じ制服を着ている生徒たちが集まっていた。そのサイドには青い目をした琉美なドラゴンが数匹、ステンドグラスから差し込む光に幻想的に映しだされながら手綱などもされずに大人しく鎮座している。意識が遠のいた昨日の出来事は、決して幻ではなかったのだ。中里翔の視覚器官は見事なほどに正常に働いていた。見間違えではなかった。情けなくも「うわあッ……！ あっ、あ……！」と声を上げてしまう。「うるさい！ 静かにしなさい！」とソフィーに小声で注意されるもこれは仕方ない。誰だってあれだけリアルなドラゴンを見せられると翔と同じ反応をしてしまうだろう。

「あっ、ソフィーがきたみたい。にゃあにゃあ」
「本当だ。昨日の子も一緒だね」

列に並ぶアリシアは自慢のふわふわのネコミミをピンと立てながら、綺麗な白髪のユーディット・フォン・ルントシュテットとこそそ話をする。

「やっぱり昨日見たとおり、ちょっとヒョロいのにゃ」

「本当にあの人、強いのかしら？」

ソフィーは彼女たちのもとに列をかき分けながら近づき、ちょうど一人分が立てる空き場所を見つけて列に加わった。

「ちょっと！　なんであんたも付いてきてんのよ！」

「え？　いやいやあんたが連れてきたんだろうが！」

「じゃなくて！　ここに並ぶのは生徒だけ！　あんたは生徒じゃないんだから、あそこに行つていなさい！」

ソフィーが指さした先は、先程再び彼を驚嘆の絶頂に追いつめたドラゴンたちが鎮座している場所だった。

「うええっ！」

「変な声上げないでよね！　叱りたいの？」

ソフィーは「黙って従え」とでも言いたそうな視線で彼を威圧する。

「いいから、ほら。さっさと行きなさい」と背中を押されて、翔は仕方なくドラゴンたちが居座る場所へと移動する。

「……」

青い目のドラゴンと翔の黒い瞳が合う。

「……どうも……」

よく分からないが、彼はお辞儀をひとつしておいた。

するとそのドラゴンは「グフツ」と鼻息を吐いて小さく首を振る。まるで馬のようだ。それに驚いた翔は思わず後退してしまうが、その時に後ろ足で何かを踏む感覚を覚えた。恐る恐る振り返ってみると、それは別の竜の尻尾だった。長い尻尾が前方まで余って流れていたのだ。翔は息を飲んだ。トラックに引かれる寸前に強制召喚されて一命を取り留めた彼であるが、2度目のピンチも自ら招いてしまった。

「わああっ！」

思わず声を上げてしまう。

その声は巨大な講堂で話している校長を遮るほどであった。

講堂に集まっていた生徒たちも「何だ何だ？」とざわつき始める。

「あのバカ……！」とソフィーが顔を右手で覆う。

「ドラゴン初めてなのかにゃー？」

背の低いアリシアはピョンピョンと跳ねながらその様子を見ようと頑張る。

「やっぱり召喚人は皆同じような反応だね」

「……そうね、まあ放つとけば直に慣れると思うけど、あんな目立つ所で……！ あとで殴る」

「やめとけにゃあ。可哀想だにゃあ」

猫のようなつぶらな瞳を細めてソフィーをなだめる。

宣告通り翔には鉄槌がくだされた。

「何で殴るんだよ！？」

「なんでもクソもないわよ！ 目立つ真似しないでくれる！？」

生徒たちが教室や寮に引き返す中、巨大講堂の中で説教(?)を受ける光景。小学校だとよく見られる光景だ。

「仕方がないだろ！ ドラゴンだぜ！？ ドラゴンがいたんだぜ！？

さすがに無理だつて！ 驚くわ！ しっぱ踏んだし！！！」

「しっぱを踏んだのはそっちが悪いのにゃあ」

ソフィーの横にいる小さい女の子が訂正を入れる。

「まあまあ、シヨウくん。いずれ慣れるから、気にしないで頑張つてよ。ソフィーもそんなに怒つてないし！」

「怒ってるわよ！！ 恥ずかしいじゃない！」

急に話に入ってきた二人に戸惑う翔。

「あの、二人は……」

「ああ、紹介が遅れたね。にゃあ。私はアリシアだよ。そのままアリシアって呼んでね」

にっこりと微笑んでくれるが、猫耳がとても気になる。「まさか自前じゃあるまいな？」と、無意識にもその耳に触れてみる。

「あつ……！ ふつ……ああん……。今回の召喚人くんは積極的だにやああ！ 良かったにやあ、ソフィー？」

ソフィーはすでに翔に2度目の鉄拳制裁を加えていた。同時に「変態！」と罵られる。どうやらアリシアのソレはアレのようだ。

「いきなり女の子に触れるのはマナー違反だよ？ 気を付けないと！ ね、シヨウくん？」

手を差し伸べてくれる胸の大きい白髪の子。目鼻立ちのくつきりとした、清純なイメージの持てる可愛い女の子だ。

「私はユーディット。よろしくね、シヨウくん。私のことはユーディットでいいからね」

思わず鼻の下が伸びてしまう。

ところで、ユーディットは自己紹介もしていない中里翔の本名は知らないはずだ。知っているのは学校関係者とソフィーだけ。その証拠にアリシアも彼のことは「召喚人くん」と呼んでいる。それなのに何故彼女は「シヨウくん」と呼んでいるのか。それは。

【召喚人 しょうかんにん シヨウくん】

ただの偶然だ。

3人が翔を取り囲んで話をしていると、「おーい、早く教室に戻れよ。授業すんぞー」という声があった。

「あ、はい。すみません！ すぐに行きます」

その男性は中肉中背で30〜40代の外見、メガネをかけているがとても人当たりのよさそうな雰囲気を持っていた。

「次はカトラル先生だっけ？」

「そうだにやん。私たちは違うけど、上級生の時間割へんこー！」

3人は教室に向かおうとする中、翔は「あんたも来るのよ！」と手を引っ張られる。「何の義理があつて付いて行かないといけない

んだ」と思うも、ここが何がなんだか分からないので下手な行動を取るわけにも行かない。「ああ、これで学校の欠席1かあ……」と嘆く。ドラゴンを見たのにまだ帰られる気である彼だが、もう気も動転しきっている。今の彼には常識など通用しない。

「また遅刻させる気!？」と手をグイグイ引つ張るが、翔は全く乗り気ではない。テンションだだ下がりだ。意味のわからないところに連れていかれて、しかも意味のわからない学校に拉致監禁(?)されて、警察という言葉にも全く恐れを示さないソフィー。逃れる術などあるのだろうかと模索するも、ここがどこだか分からない上にドラゴンまでいる。どうしようもない。

「君が、召喚人かな?」

講堂で話していた人が彼の前に現れる。

振り返ると、3人もぴしつと行儀よく起立している。

「……はい」

「身構えなくてもいい。私はラス・ベギリスタイン。このストレシエール国学院の校長だ」

威厳のある白ひげと重厚感のある瞳、声。それら全てがその地位の高さを物語っている。初見の翔でさえそのオーラで階級上位の人だと気付かされるほどだ。

「ソフィー、召喚人くんを、少しいいかな?」

ストレシエール国学院（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

俺が強いなんて、見当違いも甚だしいですよ。

最上階にある校長室で対峙する二人。

「残念ながら」という言葉から始まった校長の話は、それはもう信じられなかった。全く支離滅裂であり、ご都合主義であり、非常に強引なものであり、信じるに値しないものであった。

「何を言っているのかわかりません」

翔はせっかく長々とこの経緯を説明してくれたラス校長の肩透かしを敢行する。

「……どの辺がわからないのかね？」

気を取り直して、翔の理解を得るべく彼への情報の再入力作業を開始する。

「まず、俺が『死んでいる』とは、どういうことでしょうか」

翔は掌いっぱい嫌な汗をかきながらギョツと強く握る。

「ふむ、『死んでいる』というのは語弊があったかな。それは訂正しておこう。この表現が不適切ならば、『死ぬ予定だったところを召喚により回避した』と言い換えるべきか」

「……はあ？」

気の抜けた返答。

そもそも召喚など、翔の知っている世界には存在しない。

「つまりは、君は死んではいけない。だが、あのままだと死ぬ所だった。その当時の君の身に何が起きたのか詳しくは知らないが、そうだろうか？」

生唾が喉を伝う。

翔はあの身の毛もよだつ光景を思い出した。

トラックが接近し、その冷たい金属が肌に触れようとする、あの
おぞましい瞬間。

あれは、彼の夢ではなかったのだ。

「人が死ぬのは避けられないことだ。私たちの力を持ってしても、

助からないものは助からない。だが、その瞬間に陥る前であれば助けることができる。ソフィーはそれを君に施したわけだよ。君はソフィーに命を助けてもらったんだ。その引換として、この異世界、『ストレシエール』に飛ばされた。それだけの話だ」

先ほどの説明をもう一度する校長。髭が長いのが気になる。

「『それだけの話って』……！ わかんないですよ！ 確かに俺は死にかけました。今の今まで、この世界が夢なんだって思ってた。もしかしたら死後の世界かもとか思ってた。ですが、校長の話聞く限りではここはそうじゃない。俺が今まで住んでいた世界とは違う、別世界……。こんなの、聞いたこともありません！信じられる訳ありません！」

「矢継ぎ早に文句を言うんじゃない」と右手の掌を翔に向けてストップの合図を出す。

「君が信じないのはあなたの勝手だ。だが、ここは確実に別世界。直に信じざるを得なくなるよ。正直な話、そんなことは強制的に分からされることなのだから、議論に上げるまでもないのだよ」

翔は否定したかった。言えるものならば挑発的な否定の言葉がどんどん出てきそうな勢いだ。しかし彼は言葉を紡ぐことを止めざるを得なくなってしまう。貴族、見たこともない景色、極めつけにはドラゴン。言ってしまうえばソフィーもアリシアもユーディットも翔の知っている世界の人々とはどこか違うような印象も感じる。特にアリシアに関しては人外の耳が生えていた。

「一応は形だけでも理解、してもらえたかな？」

わざと一拍置いて強調する校長。

「じゃあ……」

かすれるような小さい声。

「じゃあ、もしかして、俺は帰れないんですか？」

「そうだ。帰れない。君が飛ばされた世界はもう君抜きで動いている。君を強制的にあの世界に戻すのであれば、矛盾のない瞬間を選んで飛ばし直さないといけない」

「矛盾のない瞬間……?」

「覚えているだろう? ココに召喚される前に、自分がいたその瞬間の場所、だ」

翔は恐怖で体が震えた。

彼が元の世界で最後にいたその瞬間、それは。

「戻りたいか?」

「い、いえ……」

戻れば即死だ。観念せざるを得ない。

「では、ここからが本題だ」

翔は驚いた表情を見せる。

「ええ!? 今までののは前フリ!?!」

「そうだ。ここが君の知っている世界ではないということ的前提として知ってもらわないと話が通じなくなってしまうからね」

かれこれ30分以上経っているが、これが全て前フリだとは翔も流石に思わなかった。

「君が何故ここに召喚人として選ばれたのか、について」

翔は息を呑む。

「ソフィーが君を召喚能力で喚び出したわけなのだが、実際は君を指定したのは私だ。ソフィーは偶然だと思っているだろうが、それは違うのだ」

もちろん翔は訳がわかるはずがない。「なんでですか?」と漠然かつ正当な質問を豪速球で投げ返す。

「そりゃ、君が強いから。それだけだ」

翔は拍子抜けしてしまう。

「俺が強いなんて、見当違いも甚だしいですよ。むしろ弱いです。ましてや超能力なんて……」

この返答に校長は「何も知らんのお」と背筋を伸ばす。

「別に認めなくてもいい。直にわかる」

全く釈然としない回答だ。「何が」という反論も、その返

答の一点張りで返されてしまい取り付く島もない。

「……はあ、もういいです」

観念した翔に校長は「勝った」とニヤニヤする。高貴さも伴いながら、どこぞの悪代官のように映るのは気のせいだろうか。

「……ソフィーはな、弱いんだ。皆が使える超能力が、一つも満足に使えないんだ。どうせ一度は死んだ命。そんな自分を救ってくれたか弱い女の子を守ってやるのも、また男のロマンじゃないか？」

翔は反論ができない。

確かに一度は死んだ命だ。今熟考してもあの状況から助かる方法が思いつかない。ソフィーが召喚してくれたから、今の自分の命がある。

コンコンとノックをする音。

ガチャリと開かれたドアから出てきた人は、上級軍曹のような顔つきの、いかにも凜々しい男性だった。背丈も180センチ前後はあるだろう。髪は短めに整えられており、眼光はまるで獲物を前にしたライオンのようだ。しかし紳士としての高貴さを兼ね備えており、スーツ姿が抜群に似合っている。

「シエンか。どうした？」

「……」

言葉は発しない。

翔は完全に彼の圧倒的な雰囲気呑まれてしまい、言葉を失ってしまっている。

シエンと呼ばれるその男性は胸ポケットからメモとペンを出し、さらさらと何かを書いて校長に差し出す。

「ほう、まあた政府か。私は今いないと伝えておいてくれ」

「こゝちよゝ！ 連れてきたよ！」

長い髪の毛をふわふわと揺らしながら一人の女性が厳しい顔をした政府役人を連れてくる。

「……」

口を大きく開けて驚嘆する校長。

彼女はシエンに額にメモ帳を突きつけられて「あたっ!？」と驚きながら痛がる。そのメモには、「許可無く連れてくる奴があるか!」と書かれていた。

「えー! だつて用があるつて言つてたんだけど!」

「バカ正直に対応をするな!」と即座にメモで返答される。意識はしていないが、半筆談のこの状況では詰めかけた政府役人には話が分からないから、とりあえずはセーフティラインだろう、か……?

「あ、ああ。シエン、もういい。ウラと召喚人を連れて、席を外してくれないか?」と会話を寸断させると、校長は政府役人と自分を部屋に残して、3人を部屋から追い出してしまった。

廊下でシエンにボカツと頭を小突かれるウラ。

「いったーい! 何するのよう」

ウラは涙目で抗議に出る。肩まである銀髪と、低めの身長に目鼻立ちのくっきりとした可愛らしい女性だ。容貌から察するに、彼女もシエンもきつと教師だろう。彼女の目の前には「政府役人は校長の許可なしで通してはいけないと、何度言ったら分かるんだ?」と書かれたメモが突きつけられているが、「ひ、人は間違いを犯す生き物なんだよ!」とウラは両手を振ってそれを否定する。

「ねえ? 召喚人くん?」

「うえ!?! あ、はい、そうですね……?」

突如同意を求められた翔は反射的に賛同してしまう。

「ほらあ」とシエンの方を振り向いたウラは同時にメモ帳で小突かれた。そしてシエンはそのまま方向を変えて向こうの方に歩き去ってしまった。

「むー!」と不満そうな態度を示すウラ。

「お、話は終わったのか?」

眼鏡のよく似合う朗らかな印象を受けるあの先生がこちらに近付いてきた。

カトラルだ。

「終わったんなら、早く教室に行かないとな！ ソフィーがお待ちかねだぞ？」

「おお、ソフィーのパートナーって君だったのかぁ」

ウラは両手で小槌を打つ仕草をする。

「おおそうだ。中里翔くんつつつてな」と、翔はカトラルに自己紹介をされてしまう。仕方ないので「どうも」と愛想笑いを浮かべるしかなかった。

「初めまして！ 私はウラ。それでもストレシエール国学院の教師なのですよ」

誇らしげに胸を張る。大きめのバストがしんどそうだ。

「ちなみにあの無口なおっさんはシエン。シエンも教師だからね」

彼の予想は見事に当たっていた。

俺が強いなんて、見当違いも甚だしいですよ。(後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

侍

見るからに重厚で重たそうな扉を、力を込めて押す。すると意外にも簡単に開いてしまい、「うわっ!？」と声を上げてしまった。

もちろん、大講堂とはいえ先生が授業をしている空気の中で、後方からいきなり声があれば皆の注目も集まってしまふ。先ほどの一件で翔は少し顔の知れてしまったので、皆の反応は「ああ、またあいつか」という程度で収まった。しかしそれはソフィーにとっては恥ずかしいことであり、「早くこつちに来なさい!」とわざわざ席を立って手を引きに来てくれた。

「もう、何してんのよ! 恥ずかしいじゃない!」と、席に座りなおしたソフィーは、自分の横の席に座らせた彼に小声で苦言を呈する。

「だって、扉が思ったより軽くて……」

「はあ? 訳わかんないんだけど。どうでもいいけど、目立つマネはやめてくれない? っていつても手遅れだけど! バカ!」

これで連続2回目だ。翔も「う……ごめんなさい……」と反省するのが筋だろう。

その光景を、講義を続けながら何度も何度もちらちらと見つめる教師。「あれは……」と、心に嬉々とした確信を持ちながら教鞭を振るう。その手に自然と力が入ってしまうのは、その彼の確信が的中しているからだという、明確な自信からくるものだろう。

授業が終わってもまだ文句を言われ続けている翔。授業中も小声で叱られていたのだが、終わっても延々と続くそれにうんざりしてしまう。しかし、自分の命を救ってくれた彼女に歯向かうのも何だか歯切れが良くない。たとえ、彼女がその真実を知らなくても、反論するのは咎めてしまふ。なんせ、命の恩人だ。彼女がいなかったら、彼は確実に死んでいた。強く出ることなんて、普通の人間ならばできない。もちろん翔も例外ではない。強くなんて、出られるわ

けがない。反省の言葉と共に「ぐう……」と押し黙ってしまう。まさにグウの音も出ないとはこのことだ。しかし、そんな幸運で不憫な彼のもとに一つの助け舟が渡される。

「その召喚人！」

授業が終了した講堂に、その声が一際大きく響く。

驚いた翔は「俺のこと……？」とソフィーに確認を取る。「そうじゃないの？」と、心許無さげに答えるソフィーだが、本人も思わず驚いてしまったことを翔にバレないように取り繕うのに精一杯であった。

そして、急ぎ足でツカツカと迫ってくる教師。その足音にもいちいちビクビクしてしまうのは、彼がこの世界にまだ全然慣れていないからだろうか。

「君、名前は！」

目の前に佇む教師に両肩を強く叩かれ、掴まれる。翔は「ひいつ」と一歩引いてしまう。アリスアとユーディットは遠くからその行く末を眺めているが、助けてくれる様子もない。成り行きをワクワクした目で見つめるだけだ。「うう……絶対助けてくれる気ないよ、アレ……」と、心のなかの救助要請をするまでもなく即却下。

「な、中里翔です……」

ただの自己紹介に、恐る恐る答えてしまう。

彼の名前を聞いたその教師は「中里……翔……」と、彼の両肩に手をおいたまま感慨深そうに首を下にむけてしまう。その反応に、翔は大きく戸惑う。「えっ、どうしたんですか？」と気遣う。その奇妙な光景に、即横にいるソフィーもただばかんと見つめるだけ。「その懐かしい響きのある名前、風貌から察するに……中里翔といつたか、お主、もしか……」

声が震えている。彼の両肩に置かれる手も同時に震えている。

「日本人か……？」

武骨な彼の顔はくしゃくしゃになっていた。
そして、訴えかけるような目。
見覚えのある、その肌の色。

翔は「はい」と肯定する。

同時に、「やった
！！」と大歓声を上げて喜ぶ。またしても講堂に声が響き渡る。「相変わらず大きい声なのにや」と少し離れた位置にいるアリシアが感想を漏らすほどだ。その教師は肩に置いていた手を翔の両手に移動させ、ギュウツと強く握る。

「私は時任鹿之助！ お前と同じ、日本人だ！」

翔は驚きの表情を隠せない。その隣で、「何言ってるのかわからない」と言いた気な表情を浮かべて立ち尽くすソフィー！。

「いやあ！ 懐かしいなあ！ 懐かしいなあ！！ もう日本人には会えないって、ずっと思ってた！ よう来た！！」

まるで久しぶりに会った田舎のお爺ちゃんのような反応に、思わず翔は一步引いてしまう。しかし彼の風貌は「田舎のお爺ちゃん」とは程遠く、20代後半もしくは30代前後と推測される。更に彼の容貌もよくよく観察してみると、羽織のような服に足袋のような足元。腰には刀が差してある。それは翔の思い描く侍に限りなく近いものであった。

「さ、侍！？」と驚く翔など意にも介さず喜ぶ鹿之助。

戸惑う翔に、ソフィーは「時任先生も召喚人よ」と伝える。

「って、侍も召喚できるの！？ 時代を遡れるのかよ！？」

「？ はあ？ 時代を遡るも何も、私たちは能力のある人間を拾い上げているだけだから、そっちの時代考証なんか知らないわよ。あくまでランダム。そうじゃなかったら、私だってあんたなんか選ばなかったわ」

翔の召喚については、実はランダムではないことをソフィーは知

らない。

「そりやまた強引なこと」と翔は思ったが、召喚人は能力のある人間が命を落とす瞬間に救い出すシステムであるということから、救い出された自分は文句を言えるはずもない。

「そうなんですか？ 先生も召喚人なんですか？」

感涙にむせぶ鹿之助は、翔の問に振り向く。

「そうだ。危ないところをラス校長殿の召喚術で救っていただいた」
時任鹿之助は召喚人。

ということは、何かしらの能力があるということだ。

しかし翔自身に能力が発現確認されていない今、いささか信じられるものではなかった。鹿之助も、パツと見は刀を腰に差した観光客にしか見えない。「絶対能力なんてねえよ……」と、マイナス方向の確信が強まってしまふ。

「なんだかなあ」

翔は溜息をつかざるを得なかった。

「ふう、相変わらずお固いですね」

政府の関係者と見られる数名は、首を縦に振らないラス校長に痺れを切らせる。

「白状も何も、私は何も知らない。何度も言っているだろう？ だから、交渉のテーブルにも付けない。以上だ。帰りなさい」

政府役人たちは校長室から半強制的に追い出される。追い出された彼らを確認したウラとカトラルは入れ替わりで入室した。

「また政府の役人ですかあ？ しつつこいですねー」

「まあ、彼らにとってはこれが仕事なんだから責めることはできな

いけどね。それよりも、この指令を出し続ける政府中枢が問題だ」
腕組みをして口を尖らせるウラをなだめるようにカトラルが状況を整理する。

「奴らは私の尻尾をつかんでいる」

ラス校長の重い口が開く。

「……でしょうね」

「やっぱり、アレですか」

カトラルもウラも、校長が指すものが何なのかは分かっているようだ。

「Angel Code……」

侍（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

努力の尊さ

夜の帳が下りる。

ストレッチェールにも朝昼夜はきちんと存在し、不慣れな土地ながらこの辺は翔の生きてきた世界と何も変わらないようなので戸惑いはなかった。彼が一番楽しみにしていた夕食は、中里翔が人間であるということも大きく考慮されて、生徒ほどではないがそれなりの食事が用意された。牛肉のローストに、ポテトサラダ、パンとマーガリン。今まで1000円の菓子パンしか口にして来なかった彼にとって、これがどれだけ美味しかったことか。感動で涙が出そうになりながら全てを綺麗に平らげた。近くで食事をしていたドラゴン達に若干引かれていたかもしれないことなんて、彼の知った事ではない。「引くなら引け！」という心意気だ。断っておくがドラゴンと人間の食事は一緒のものではない。

問題はその後だった。

彼の家はこの世界にはない。あのかび臭い畳に隙間風入り放題の彼の旧家は、この世界には存在しない。あるのは一面高級感で埋め尽くされたカーペットの敷いてある、テレビの中でしか見たことのないほどの超セレブが宿泊するような一室だけだ。これが生徒一人に与えられるストレッチェール国学院の寮室だというのだから、貧乏人の翔からすればたまったものではない。

翔はソフィーから「あんたの家はここ」と言われている。他に行くあてがあるわけでもないし、ましてやドラゴンが空を飛ぶ世界でたった一人身寄りもなく彷徨うなんて真っ平御免である故に、ソフィーがこの指針を差し伸べてくれたのは彼にとって幸運であった。

ソフィーのいう「あんたの家」というのは、先刻も記したとおりソフィーの寮室である。ソフィーの寮室というと、当然ながら住んでいるのはソフィーだ。もっと言及すると、ソフィー一人だ。そして、その一人で住んでいる寮室に翔は誘われている。

これは一体何を意味するのか。

きつと何も意味していないのだが、女っ気のなかった翔は少しだけバツの悪そうな表情を浮かべる。

「……何よ」

夕食後、ソフィーはずっと自室の机に向かっている。ぎこちなくソファーに座りながら彼女を眺めていたら牽制球が飛んできた。

「いつ、いや、何も」

ソフィーの寮室には彼女と翔だけ。二人しかいない。

会ってからずっと高飛車な態度なソフィーだが、それとは反比例するようによくよく見てみればやはり強烈な美人である。思わず彼女をポケーっとな眺めてしまっていた翔は、しかめっ面をされて不審がられてしまったのだ。

「あのさ、さつきからずっと何してるんだ？」

「見りゃあ分かるでしょうに。勉強よ、勉強」

そう答えたソフィーはまた机に体を向け直す。

「へえ、偉いなあ」と感心しながら自分も同じ学生という立場だったことを思い出し少し慌てる。しかし恐らく帰還できないだろうことも同時に思い出して部屋の隅に置きっぱなしにしていたカバンから教科書を取り出す手を止める。

「ま、明日はテストだし。そりゃ勉強もするわよ」

「テストか……。そりゃ頑張らないとなあ」

「同情なんていらぬから、あんたはもう寝なさい。部屋の端っこで」

「端っこかよ！」というセリフも虚しく、ソフィーはそれから反応してくれなくなった。「端っこって言ってもなあ、一体どこならいいんだ……」という困惑気味な独り言に、ソフィーは無言で場所を指さす。そこには毛布が一枚置いてあった。普通ならば人間の尊厳、威厳に関わる問題として異議を申し立てるべきところだ。しかしふわふわのカーペット（床）の上に毛布まで提供してもらえるこ

の状況の方が以前の生活の比にならないほどの好待遇なので、彼は文句どころか感謝の言葉を添えてそこに寝転んだ。ソフィーも何故感謝されたのかよく分からなかったようだが、「ま、いつか」とまた勉強にもどった。

夜の闇の深みは折り返し地点を過ぎ、そろそろ陽の光が差し込んできそうな時間帯。

地球でいう「月」のようなものが赤と紫、青の入り混じった妖艶な色で夜の闇に花を添えていたが、それもだいたい白んできた。

翔は早起きだ。どれだけ過酷なアルバイトをしても、定刻になると必ずといっていいほど正確に目を覚ます。だからこそ先日の遅刻は彼にとって全くの想定外の出来事で、周囲への配慮など一気に思考の外へと追い出されてしまっていたのだ。その不注意が招いた結果が今のこの現状。しかしもうそろそろ悲しむよりは前向きに生きるべきだと、彼も少しずつ観念し始める。

右手で目を擦りながら、左手でふわふわのカーペットを掴んで起き上がる。彼の左手にあるのは木で彫刻の施された、どこぞの貴族が使うようなベッド。もちろんそれはソフィーのベッドである。寝ぼけ眼で彼女がいるはずのベッドに目を向けたが、既にもぬけの殻というか、寝た形跡が見当たらないほどにきちんとベッドメイクされている。羽毛と思われる枕に頭の凹んだ跡さえない。翔が少し変に思い始めた時、水の音が聞こえてきていることに気がついた。「なんだ？」と思いつつその音が聞こえる方に歩みを進める。

堅い床を叩くような水音に、ほんのりと暖かさを感じる部屋。翔の前には小汚い格好をした自分を映し出す鏡。「なるほど、風呂場か」と、途中で気づいていたが改めて納得する。風呂は翔の部屋にはついてはいなかった。しかし大概の家には風呂がついているものが主流なので、その存在の尊さに再び心を打たれていたのだ。しかも全面大理石な上に聞いても効能のわからなさそうな超高級化粧品と思しき小さなビンの数々。男の彼には興味のないものであるが、

どこか金持ちの象徴のように思えてきてしまい別の意味で目を奪われる。

彼は完全に油断しきっていた。

ガラッと扉が開いたときには、既に対処不可能だったのだ。

生き物は音にとても敏感なものだ。大きな音がすれば万人がその方向を見てしまうし、人間どころか犬や猫などの動物もその方向に注意を向け、しかるべき次の行動を思索する。音というのは状況の変化をいちはやく知らせる信号であり、危険を教えてくれるサインだ。だから翔が「ガラッ」と音の鳴った方を見てしまうのは不可抗力だ。決してソフィーのあられもない姿を見たかったというわけではない！

「言い訳はそれだけ？」

制服に着替えて身だしなみを整えたソフィーが不機嫌丸出しの語調で翔に詰め寄る。

「それだけです。本当にやましい気持ちなんて、これっぽっちも！手には引つかき傷、顔には打撲痕。

翔もわざとではないとはいえ、当然の報いだとこの制裁を甘んじて受け入れる。

「全く！次やったら焼くからね！」

「すみません、すみません」と頭を下げる翔。こうなれば頭も上がらない。そして視界に入る教科書。手垢がついてボロボロになっている。

「無駄な労力使わせないでよね。今日は試験なんだし」

ソフィーは欠伸をして出てきた目尻の涙を袖で吹く。

「ん、あのさ。ソフィー、昨晚は寝た？」

「寝てない」

「徹夜で勉強するのもいいけどな、でもやっぱそういうのって体に良くないぜ？」

翔の正論にソフィーは目線をそらす。

「……………仕方ないじゃない」

「ソフィーって勉強ができた」

「できるわよ！ 失礼な！」

自分で「できる」と宣言するソフィーも相当だが、しかしできるのであれば徹夜などせずともクリアできるのではないかという疑問が彼の胸をよぎる。

「何よ、その目は」

「いや、できるんだったら徹夜なんかしなくても良かったんじゃないかなあって……………」

「勉強はできるっての！ でも……………」

「でも？」

「……………実技ができないのよ……………」

いつもは自信に溢れている彼女の表情が曇る。

「……………実技？ 何だそれ？」

「試験は学業と対戦形式の能力実技試験があつてね。合計点が140点を超えないと進級できないの。って言っても浪人制度はないから、結局はただ合格の称号がもらえないまま上げさせられるんだけどね。アリシアもユーディットももう先に行っちゃったし、私だけこれ以上置いて行かれる訳にはいかないのよ。周りの目だつてあるし……………。だから、寝ないで練習してたの。それだけ！ でも、その甲斐もあつてね、ほら！ これ見て！」

パツと笑顔の花が咲いたソフィーが差し出したのは、端っこが少しだけ焦げた一枚の紙切れ。

「……………ヤケになって火をつけたのか……………？」

「違うわよ！！」

翔はバシバシと頭を叩かれる。

「炎！ 炎の能力が、やつと使えたの！」

「うげえ、ソフィー、炎出せるのかよ……………」

次からの仕打ちに炎が加わると思うと背筋が凍る感覚を覚えた。

「まだちよつとだけだからね。それでも相手次第ではわからないかも！ 前までは全然使えなかったから話にならなかつたけど、今回は違うんだから！」

ソフィーは眼の下にクマを携えながらも湛える瞳は希望に満ちていた。それは自分の努力が開花しようとする瞬間。

中里翔は努力の尊さをよく知っている。それが誰にも認められなかった時の、あのなんとも形容し難い失望感と脱力感も知っている。紙が少し焦げる程度の能力だが、それでも彼女にとってはとても喜ぶべき大きな変化だ。ソフィーは「対戦形式」の実技だと言っていたので、恐らく勝ち目はないだろうことは素人目でも予想がつく。しかしそれでも、それでも彼はソフィーに勝つて欲しいと心から願った。彼は努力が報われますようにと思いを込めた笑顔で、

「そうか。頑張ったんだな！ じゃあ、頑張れよ！」と答えた。

ようやく差し込み始めた朝日に、彼の笑顔に意表を突かれたソフィーの表情が鮮明に映し出される。

努力の尊さ（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7229x/>

Angel Code

2011年11月23日23時55分発行